

モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町

期 間：2011年12月13日（火）～17日（土） 10:00-17:00

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 16号館2階 ホワイエ



「モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町展」を観て

金 容 範（非文字資料研究センター研究員）

このたび、本神奈川大学非文字資料研究センターは、2011年12月16日、韓国ソウルの漢陽大学校東アジア文化研究所と学術交流を提携することになった。その記念として、同日に、「京城の都市・建築そして生活」の公開研究会が催され、また、両研究所の調印式に先立って「モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町」（以下、京城巡礼展）の展覧会が、5日間、神奈川大学の横浜キャンパスで開催された。

京城巡礼展は、漢陽大学建築学科の冨井正憲と韓東洙、両教授を主とした「ソウル近代都市建築研究会」が主催したもので、歴史地図や絵はがき、建築図面、映像などの様々な非文字資料を用い、近代都市へ変貌したソウルの1930年代の姿を捕捉した、貴重な展示であったのである。

京城巡礼展は、今回の展覧会で3回目の展示となった。2011年3月にソウル市清溪川文化館での3ヶ月の展示（展示名：「京城1930」）を始め、同年10月には駐日韓国大使館東京文化院で2回目の展示を行い、韓国の学者や研究者らには高評価をいただき、また京城で生まれ育った人々にとっては懐かしい思い出を呼び起こすものとなったのは間違いない。

ここでは、京城巡礼展について、今回の展示物と内容を紹介し、そのうち、近代京城の建築が描かれた絵はがきを取り上げ、韓国近代建築の研究における絵はがきの

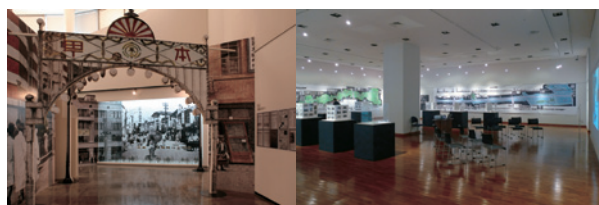


図1 左側はソウル市清溪川文化館での「京城1930」の巡回展示場、右側は駐日韓国大使館東京文化院での展示場



図2 神奈川大学横浜キャンパスでの学術交流提携記念の展示場

非文字資料としての重要性に改めて注目したい。

京城巡礼展の内容と特色

京城巡礼展は、近代京城の都市空間の軸を成していた鐘路と本町、2つの通りに展開された商店街を復元している。80余年前の商店街の町並みと、そこに建てられた建築を復元するために、冨井教授の研究会は、非文字資料と文字資料を合わせて集めた膨大な資料に関して綿密な分析を行い、その成果がようやく展覧会を通じて公開されたのである。そのうち、今回の展覧会に展示されたものとしては、次のものが挙げられる。

- ① 1930年代の鐘路商店街の復元地図（縮尺1/300）
- ② 1930年代の本町商店街の復元地図（縮尺1/300）

- ③ 鐘路・本町・黄金町の都市景観と建築、朝鮮風俗が描かれた絵はがき 80 余点
- ④ 「朝鮮博覧会図絵」の鳥瞰図（吉田初三郎作、1929）
- ⑤ 京城精密地図と交通案内図
- ⑥ 京城案内パンフレットや案内書
- ⑦ 「京城」フィルム（清水宏監督、朝鮮総督府鉄道局、1939）
- ⑧ 鐘路と本町に建てられた代表的な建物の図面と説明書、商店街の立面図
- ⑨ 復元作業過程の資料と発表論文、出版物

このような展示物のうち、最も注目すべきは、鐘路と本町の復元地図である。復元地図は、富井教授が 25 年前に入手した「京城地形明細図」（1927）と「京城府管内地籍目録」（1917）から作られた市街図がベースとなり、各商店の位置と土地所有者、地価などの詳しい情報を明らかにするために、地番入り地図はもちろん、当時の電話番号帳、商工名録、商店街調査資料、写真帖などの新たな資料を入手、すべてのデータを比較・検討しながら、一つ一つの商店に関するチェックを行ってきたという。また、商店街に建ち並んだ建物の情報に関しては、主に「朝鮮建築会」の機関誌『朝鮮と建築』から集めた図面などのデータを用いている。

また、もう一つの注目すべき展示物としては、展示場で流された清水宏監督の「京城」映像資料が挙げられる。「京城」は、京城を訪れた旅行客の視線から、当時の京城市内の姿を撮影したものであり、今までの京城関係の資料にはあまり見られなかった、非常に貴重なビジュアルな資料が公開されたのである。この映像は、1939 年に朝鮮総督府鉄道局の宣伝物として発表されたもので、官公庁や百貨店、ホテルなどの大規模な建物を始め、商店街のショーウィンドウや露店、劇場、動物園、ゴルフ場など、主に娯楽施設や昼夜の繁華街の風景が映し出され、京城観光を広報するために作られたのがよく分かる。この映像が流された時、日本人と朝鮮人が混ざった人々の群れが三越や京城駅のプラットホームに夥しく集まっていた光景が強く印象に残っている。さらに、「ソウル近代都市建築研究会」が、この映像に映ったシーンの経路そのままに撮影したソウルの現代版の映像も目を引いた。



図3 フランス語で発行された 1900 年代の絵はがき「ソウルの街 (Une rue de Séoul)」(권혁희, 2011)

近代朝鮮における絵はがきの始まり

こうした展覧会の内容のうち、近代京城の様々な建物を描いた絵はがきに注目してみる。まずは、近代朝鮮の絵はがきと観光業を扱った先行の発表資料*から、近代朝鮮における絵はがきの始まりに関する内容を紹介しておきたい。

* 권혁희 (2011.3), 「論考—日帝時期の観光記念の絵はがきと京城の視覚的再現」、『異邦人の瞬間捕捉、京城 1930』、清溪川文化館、pp.224-234 (韓国語) / 여환진 (2008.10), 「韓国建築歴史学会学術発表会—建築学の資料としての近代絵葉書について」、『建築歴史研究』、17 巻 5 号、pp.106-119 (韓国語)

葉書というものは、1869 年からドイツ通信省を始めとしてヨーロッパの各国へ広がっており、日本では 1873 年から発行されたという説がある。今回の展覧会に見られたように、写真を入れた絵はがきは、1891 年にフランスのマルセユで発行されたことがあり、1894 年には、郵便局から切手を貼って使用できる、いわゆる現在の郵便葉書のような絵はがきがイギリスで発行され始めた。そして、1874 年に設立された万国郵便連合 (Universal Postal Union) が、1906 年の総会で国際郵便に関する技術標準を制定し、絵はがきの発行が飛躍的に増えたという。

朝鮮は 1900 年に万国郵便連合に加入したが、実際に絵はがきがいつから発行したのかは明確に知られていない。ただ、発表資料の著者の意見によると、1900 年頃、朝鮮を訪れたフランス人教師アレベーク (Aleveque) が約 40 点の絵はがきを販売したことがあり、また、『皇城新聞』の紙面には、1901 年 12 月に「玉川堂」写真館から風俗画が描かれた絵はがきを発売した記録が載せられ



ていたという。すなわち、近代朝鮮における絵はがきは、1900年から登場したと考えるに支えられない。

1900年代の初頭から1920年以前まで発行された朝鮮の絵はがきの多くは、朝鮮人の服飾と生活、職場、伝統の儀礼などの風俗に関わったものであったが、こういった絵はがきの中に描かれた都市景観と建築は、風俗の一部として表れたものが多い。しかし、1910年を前後にして植民地時代が始まり、京城の都市化が進められながら、近代的な都市景観と建築が絵はがきのテーマとして注目されるようになったという。なかには、1910年代の中盤から幹線道路が整備されて電車が走っている市街地の姿や、その周辺に建ち並んだ近代的な建物が新たな視覚的な素材として表れている。さらに、1929年の朝鮮博覧会をきっかけに朝鮮の観光業が急成長し、こうした都市景観と建築の絵はがきは、京城だけではなく、鉄道と港湾建設とともに浮上した朝鮮半島の振興都市と観光地を中心とし、より活発に作られたのである。

絵はがきに描かれた鐘路と本町の町並みと建築

今回の展覧会には、このように発行された絵はがきのうち、近代京城を代表する鐘路と本町の町並みと、そこに建ち並んでいた建物が描かれた絵はがきが集中的に展示されていた。

鐘路と本町は、京城市内の東部を東西に横断する幹線道路で、現在は1980年代に地下鉄の完工とともに再開発された乙支路(旧、黄金町)があるが、鐘路と本町(現、忠武路)は、いまだに漢江以北のソウル市内を貫く幹線道路としてその機能を維持しており、ソウル市内の栄えた繁華街である。植民地時代の鐘路と本町は、それぞれ朝鮮人の北村と日本人の南村を代表する繁華街となり、



図4 京城市街地計画令が公布された1936年に発行された「京城精密地図」。鐘路と本町の通りが都心の東西を結んで、そのまんなかに清溪川と黄金町通りがある

2つの通りの間に流れる清溪川によって両民族の住居地が南北に分けているように、その通りの形成過程や性格が異なっていた。

鐘路は、朝鮮王朝時代の遷都(1394)の当初から最も幅広い大路として計画され、御用商人の店の「六矣廬(ユギジョン)」が集まって朝鮮時代の独占的な商権を持つ商店街として発展した通りであった。しかし、今回の展覧会に公開された鐘路の町並みには、路上に電柱が立ち並び電車が走っていた、既に朝鮮総督府によって市街地整備が行われた近代的な景観が見られる。

一方、本町は、最初から日本人の商店街として現ソウルの忠武路1・2街を中心に形成された通りである。本町の以前に、雨が降ると道がよくぬかるんだことから、「ジンコゲ(‘泥濘’の意味)」と称されたこの通りが日本人の町として造られたのは、1885年頃にジンコゲの周辺、南山の北側の麓に日本公使館が建てて日本人らが公使館を中心に集まって住み始めたことからであった。さらに、日清戦争(1894.6~1895.4)以後から統監部時代を渡って、朝鮮に渡来した日本人の人口が増加しながら日本人村も次々成長し、本町は、こうした日本人村の拡大とともに、日本人商人らの町へ発展し、1930年代に至ると、京城の都市文化を推し進めた最大の繁華街になったのである。

このように1930年代の京城の姿が描かれた絵はがき



図5 市街地整備前の朝鮮人町と市街地整備後の鐘路の都市景観
左一「(京149) 京城朝鮮人町」、右一「(京城名所) 鐘路の盛観」



図6 1930年代の本町の都市景観(「The Centre of Education and Politics at Koeia, Keijyo」)

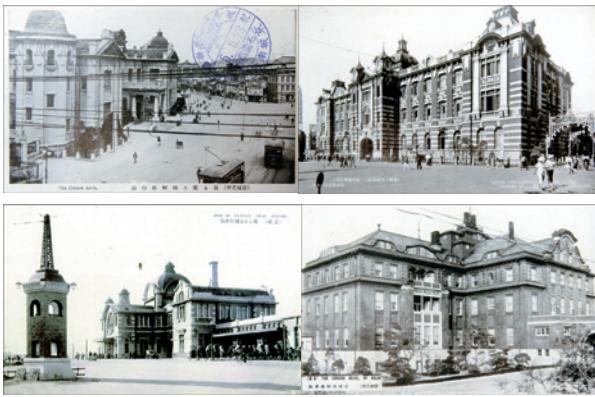


図7 京城に建てられた古典主義様式の近代建築
左から、朝鮮銀行本店（辰野金吾設計、1912）－「(京城名所) 最も広き朝鮮銀行前」、京城郵便局（設計者不明、1915）－「(朝鮮・京城風景) 京城郵便局の全景」、京城駅（塚本靖設計、1925）－「(京城) 美しい京城停車場」、朝鮮ホテル（ゲオルグ・デ・ラランデ設計、1914）－「(朝鮮名所) 京城朝鮮ホテル」



図8 京城三越（1930）－「百貨の殿堂—京城・三越」と京城府民館（1935）－「京城府民館」

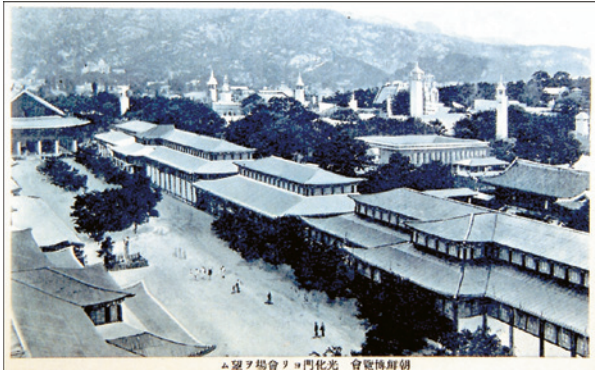


図9 「朝鮮博覧会—光化門より会場を望む」



図10 パゴダ公園と昌慶苑などにみられる折衷式の朝鮮近代建築
左から、「(京城) パコタ公園蠟石塔」、「(京 19) (朝鮮名所) 京城昌慶宮御苑博物本館」、「(京 30) (朝鮮名所) 京城昌慶苑図書館」

の中で、建築を絞って見ると、京都市内の最も中心であり本町の入口になる「鮮銀前」広場は、朝鮮銀行本店と京城郵便局、三越などの優れた建物によって取り囲まれており、京城駅、朝鮮（鉄道）ホテル、京城府民館などの、古典主義の様式からモダニズムに至るまで様々な建築を作り出した京城の近代的な建築美が目を引いている。こうした建築群の発祥には、日本近代建築の先駆者で知られていた辰野金吾と彼の教え子である塚本靖、朝鮮総督府新庁舎を設計したドイツ人ゲオルグ・デ・ラランデ（Georg De Lalande）など、日本人や欧米人建築家らが活躍したと伝えられている。

また、絵はがきに描かれた朝鮮の古建築については、公園や遊園地、博覧会場などの娯楽施設が目立っていたのが注目される。例えば、1929年の市政20周年記念の博覧会場になった景福宮や、鐘路3丁目のパゴダ（Pagoda）公園内の石塔、春の花見や外出の名所であった昌慶苑に建てられた図書館と博物館など、朝鮮建築の伝統美を活かした折衷式の近代的な建物が、先述の近代建築に劣らず、各地に建てられていたのが分かる。これらの朝鮮の伝統色を帯びていた折衷式の建築については、設計者、施工者、建築様式や技術などに関する詳しい分析とともに、韓国の近代建築研究における新たな課題であると考えられる。

近代朝鮮の絵はがきのアーカイブ構築へ

このように、近代朝鮮における絵はがきの発行が盛んに行われたが、こうした絵はがきを扱っている近代京城の都市文化と生活に関する研究は、さらに進める必要がある。また、近年、様々な個人コレクターや韓国の公共機関によって多くの絵はがきが収集されているが、それを体系的に活用することができるアーカイブの構築が急を要することを指摘したい。まさしく、今回、神奈川大学・漢陽大学の両研究所の提携記念として催した「京城の巡礼」展覧会の成果が、韓国における絵はがきを含めた非文字資料に関する再認識の促進と、それに基づいたアーカイブの開発、さらに、日韓両国の研究交流の足場を築く契機になると、期待している。